

「既ニ再ヒ外國ヨリ容喙ノ端緒相開ケ候上ハ我軍隊ノ運動最モ迅速ニシテ外國ノ干涉餘リ面倒ニナラサル以前ニ何レノ地方ニテモ占領シ置キ候事最モ必要ト存シ候御疎ハ有之間敷ナレトモ此事最モ御注意ヲ願フ」ト云ヒタルモ亦幾分カ此間ノ消息ヲ洩シタルモノナリ

第十三章 領事裁判制度ト戦争トノ關係

我國家カ比年歐洲文明ヲ採用シ百般ノ事業長足ノ進歩ヲ爲シタル結果トシテ今日内治外交ノ上ニ就キ平時ト戰時トヲ論セス事々物々障害ヲ招クモノハ我國ト歐米各國トノ條約上ニ存在スル領事裁判制度即チ普通汎稱スル治外法權ノ制度ヨリ甚シキハナシ抑學理上ヨリ論究スレハ治外法權ト領事裁判管轄トノ兩制度ハ其根本ヲ異ニシ兩者混合スヘカラサル一定ノ區別アリテ存ス即チ治外法權ハ元來無二的主義ニ根基シ甲國主權及法律ノ効力カ其儘ニ乙國領土ニ移リ乙國地方權ニ替用シ同領域ニ在留スル甲

治外法權ト領事裁判制度ノ區別

國人民相互ノ權利及義務ヲ總轄シ延テ該人民ト各國人民トノ間ニ於ケル權利及義務ノ或ル一部分ヲ規定シ其國際上ノ關係ニ於テ初ヨリ毫モ相互對等ノ觀念及主義ヲ認メス從テ之ニ對シ國際公法上普通ノ條規ヲ適用スルノ道ナキモノトス之ヲ約言スレハ治外法權制度ノ下ニ在ル一國人民ハ政治上萬般ノ事項ニ關シ其身恰モ自國領内ニ居住スルト同一ノ結果ヲ得ルモノナリ而シテ領事裁判制度ハ其初メ甲國ガ乙國ノ法律ニ對シ信用ヲ措カサルニ由來スルト雖モ此制度ハ決シテ乙國ノ法律ヲ全然無視スルモノニ非ス單ニ自國人民カ乙國內ニ於テ被告人ノ位置ニ立チタル時ノミ乙國ノ法廷ニ出席シ乙國ノ法律ニ服從スル代リニ自國ノ法廷ニ出席シ自國ノ法律ニ服從スルニ止ル治外法權ト領事裁判管轄トノ兩制度間ニ於ケル立法及行政ノ權限上ニモ亦明確ノ差等アリ即チ罪人庇保罪人引渡服從歸化交戦局外中立等ニ係ル各種ノ問題ハ常ニ此兩制

0441

度ノ境界ニ横ハル所ノ空地ヲ填充スル問題トシテ看ルヲ  
得ヘシ現今我國ニ於ケル外國裁判制度ハ領事裁判管轄ニ  
シテ治外法權ニ非ス嘗テ我政府ノ法律顧問タリシ英國人  
「ビゴット」ノ領事裁判管轄ト題スル書中ニ於テ英國女皇カ  
外國ニ於テ執行スル裁判管轄權ハ皇室世襲ノ權利ニ非ス  
亦世間ニ全能力アリト稱スル國會ヨリ附與セラレタル權  
利ニモ非ス單ニ或ル外國君主ヨリ讓與シ特許セラレタル  
權利タルニ過キス而シテ此讓與ハ多ク條約ニ基クテ以テ  
女皇ノ外國ニ於ケル裁判權如何ノ解釋ハ一ニ該條約ノ條  
款ニ於テ索看スルノ外ナシ且ツ純全無缺ノ治外法權ハ所  
謂保護國ノ領内ヲ除クノ外未タ曾テ或ル獨立國ノ領内ニ  
行ハレタルノ實例アラズ因テ治外法權ノ制度ハ畢竟其程  
度ノ問題ニ止リ程度ノ差ハ其場合ノ相異ナルニ從ヒ相同  
シカラス元來英國君主カ東方諸國ニ在留スル自國人民ノ  
頭上ニ施行スル權カハ特ニ該國君主ノ恩惠ニ出テタルカ

若ハ我兵力ヲ以テ之ヲ強取シタルカニ由リ皇室ノ大權ニ  
基ツキタルモノニ非ストセハ東方諸國ニ於ケル女皇ノ權  
利ハ單ニ該國現在ノ君主ヨリ委託セラレタル權利ヲ執行  
スルモノナリト云フモ不可ナキカ如シト云ヘリ今學理上  
ニ於テハ右ノ如ク論究シ得ヘシ然レトモ實際ニ於テハ從  
來歐米諸國カ東方諸國ニ施行スル領事裁判制度即チ其形  
質ノ相似タルニ由リ治外法權ト呼ブ制度ノ權與ヲ尋ヌレ  
ハ歐米各國ノ政府カ所謂耶蘇教國以外ノ邦國ノ制度法律  
ニ對シ信用ヲ措ク能ハサルニ由リ最初是等ノ邦國ト條約  
ヲ締結スルノ時ニ方リ必ス該條約内ニ於テ自國人民ノ爲  
メ領事裁判管轄ヲ施行スヘキ條款ヲ設ケシメ遂ニ某ノ一  
國領内ニ於テ他ノ一國ノ小殖民地ヲ置クカ如キ一種ノ變  
體ヲ構成セリ而シテ此變體ナル裁判管轄ノ施行久シキニ  
亘リ其間種々ノ紛議ヲ生ズル毎ニ愈該制度ノ正解ヲ錯亂  
シ正當範圍ノ外ニ逸出スル幾多ノ新註釋ト新慣例トヲ傍

出シ此新註釋及新慣例ハ無論ニ強國ノ爲メニ便利ナル様  
ニ適用セラレタリ故ニ均シク治外法權若ハ領事裁判管轄  
ト云フ制度ノ現存スル諸國ノ間ニ在テモ其程度及形式頗  
ル相異ルモノアルハ是ニ之レ職由スト謂フヘシ抑我國カ  
歐米各國ト條約ヲ締結シタルハ幕府ノ末運ニシテ當時外  
交上種々ノ困難アル毎ニ許多ノ惡例ヲ現出シ管ニ學理上  
ノ正解ニ違フノミナラス往々現行條約上未タ曾テ讓與シ  
許可セサル事項迄モ侵奪セラレタルコト少カラス近來我  
政府ハ勉テ其既ニ侵奪セラレタルモノヲ恢復シ其將ニ侵  
奪セラレムトスルモノヲ防守シタルトモ現行條約ノ本體  
既ニ彼カ如クナル上ハ之ニ對シ如何ナル解釋ヲ下シ如何  
ナル主義ヲ適用スルモ到底我國今日進歩ノ事体ト併行ス  
ルニキ管ナク百弊千害日ニ月ニ滋蔓スルニ至レリ是レ政府  
カ比年條約改正ノ事業ヲ以テ維新中興ニ隨伴スル重要問  
題トシ百折不挫其成功ノ速ナラムコトヲ熱望セシ所以ナ

我國ニ於テ領事裁判制度ノ弊害ヲ受ケタルヤ實ニ一日ニ  
非ス而シテ今回ノ戰爭以來殊ニ我國カ交戰國トシテ中立  
諸國ニ對スル行爲上往々領事裁判制度ト抵觸スルノ虞ア  
ルヲ感シタルモノ少カラス且ツ假設學理上ノ正解ニ於テ  
敢テ抵觸セストスルモ從來該制度ニ對シ牽強附會シ來レ  
ル種々ノ註釋ト慣例トハ遂ニ如何ナル爭議ヲ惹起スヤモ  
計リ難シ我國ハ眼前ニ砲火相接スル敵國ヲ控ヘ更ニ強大  
ナル第三國ニ向ヒ錯雜ナル葛藤ヲ生スルハ決シテ今日ノ  
得策ニ非ス然レトモ領事裁判管轄ノ存在スル間ニ於テ我  
國カ竟ニ第三國ト何等ノ葛藤ヲ生セサルヲ望ムハ猶ホ大  
石巨礁ノ縱橫散在スル長流急湍ノ中ニ舟楫ヲ通過スル船  
手カ良工苦心ノ術ヲ盡スモ尙ホ萬一ヲ僥倖スルニ過キサ  
ルカ如シ果然茲ニ英佛米三國ニ交渉スル一ノ出來事コソ  
起リタリ即チ明治二十七年十月二十五日ヲ以テ在米國栗

野公使ノ來電ニ據レハ米國駐在ノ清國公使館員某ハ元英  
國海軍大尉ニシテ現今米國ノ民籍ニ在ル水雷製造者シヨ  
「ジ、カメロン」及電氣作用上一種ノ發明者ト稱スル米國人  
「ジョーン、ワイルド」ノ兩名ヲ備入レ之ト同伴シテ十月十六日  
桑港出帆ノ英國船「ゲイリック」號ニテ歸國ノ途ニ就ケリト  
且ツ恰モ同船便ニテ歸朝シタル在墨西哥總領事島村久ハ  
船中ニ於テ畧、右ノ清米兩國人ノ關係ヲ探聽シ其次第ヲ余  
ニ告ケタルニ由リ余ハ一應之ヲ海軍省ニ通報シ置キタリ  
然ルニ此米人二名カ如何ナル技能アリテ清國ニ備聘セラ  
レタルカト聞クニ其事頗ル魔法的技術ニ屬シ即チ彼等ハ  
一モ船舶砲銃ノ軍器ヲ假ラス單ニ陸上ヨリ數里以外ノ海  
面ニ在ル敵船ヲ擊沈スヘシト云フノミ現今ノ學術界ニ於  
テ到底斯ル奇術ヲ許サルヘキモノニ非ルモ清國政府カ刻  
下ノ苦惱ニ紛レ此ノ如キ投機師ヲモ雇用スルニ至リレハ  
唯獨笑スヘキノミ然レトモ彼等ハ兎モ角モ敵國ノ軍事ヲ

幫助スル目的ヲ以テ我領海ヲ通過スル者ナリ我軍衛公之  
ヲ默視スルヲ肯セ十一月四日ヲ以テ廣島大本營ヨリ野  
村內務大臣ニ宛テ右ノ三名ハ重要ナル戰時禁制人ナリ直  
ニ英船「ゲイリック」號ヨリ勾引スヘシト電照セリ然ルニ該清  
國人ニ關シテハ無論何等ノ故障ノ生スヘキ管ナケレトモ  
領事裁判管轄ノ存在スル間ハ我政府カ歐米國人ノ身体ヲ  
勾引シ若ハ船舶ヲ繫留スル爲メ普通行政ノ處分ヲ以テス  
ルハ平時ト戰時トノ別アルニ拘ラス必ヌ多少ノ紛議ヲ惹  
起スルヲ恐アリ余ハ野村內務大臣ト協議シ上寧口之ヲ軍  
事處分ニ一任スルニ如カストシ直ニ廣島ニ在ル伊藤總理  
ニ發電シ大本營カ戰時禁制人ト認ムル米人二名ハ實ニ魔  
法的奇術ヲ行フト云フ者ナレハ縱令彼等ヲシテ敵國ニ放  
チ入レシムルモ實際何等ノ危險ナカルヘシト思ヘトモ是  
非共ニ彼等ヲ勾引スルノ必要アリトモ寧口之ヲ軍事處  
分ニ一任スルヲ專策トストノ旨ヲ以テセリ因テ十一月五

右事件ニ關シ英國  
公使ノ抗議

日橫濱ニ於テ我海軍武官ハ英船「ゲリック」號ニ臨檢シタリ  
然ルニ右ノ清米國人ハ其前日佛國郵船「シドニ」號ニ轉乘  
シ既ニ神戸ニ出帆シタル後ナレハ此英船ノ臨檢ハ表面儀  
式ニ止リタリ然レトモ在東京英國公使ハ尙ホ之ヲ不問ニ  
措カス同月八日ヲ以テ余ニ一ノ公文ヲ送レリ其概要ハ日  
本政府カ英國ノ商船ニ臨檢シタル理由ノ辯明ヲ要求シ且  
ツ該船ハ今中立港(香港ヲ指ス)ニ向ヒ航行スルモノナルニ日本  
政府カ之ニ對シ臨檢シタルハ最モ不法ノ處置ナリト云ヘ  
リ因テ余ハ海軍當局者ト協議ヲ盡シ英國公使ニ左ノ回答  
ヲ發シタリ「ゲリック」號ハ桑港ヨリ一ノ清國人ト其同伴  
シタル外國人二名トヲ乗セ横濱ニ入港セリ然ルニ此三名  
ハ日本ニ敵對スル行爲ヲ目的トシテ清國ニ赴クノ嫌疑ア  
ル者ニシテ彼等カ所有ニ屬スル兵器彈藥等ヲ同船ニ搭載  
シタルノ嫌疑アルカ故ニ日本海軍士官ハ該船ニ臨檢セリ  
而シテ來意ニ依レハ「ゲリック」號ハ横濱出帆後中立港ニ

百九十八

右事件ニ關シ日佛  
兩國政府ノ爭議

向ケ航行スルノ故ヲ以テ日本政府ハ之ニ對シ檢問ノ權ヲ  
有セスト云フ是帝國政府ノ首肯スル能ハサル所ナリ況ヤ  
該船ノ積荷中ニハ上海揚陸ノ荷物モ甚々少カラス該船ノ  
仕向港カ中立港タル香港ナリトノ一事ヲ以テ帝國政府カ  
交戰國トシテ有スル權利ノ上ニ消長ヲ來スモノニ非スト  
信ストノ旨ヲ以テセリ英國公使ハ尙ホ余ノ回答ヲ以テ滿  
足セス其後彼此屢難問往復シタル後其事ハ先ツ双方言ヒ  
分レノ姿トナリタレトモ本件ハ更ニ一轉シテ我國ト佛國  
トノ間ニ一ノ紛議ヲ生シタリ其所以ハ右戰時禁制人タル  
ノ嫌疑アル清米人カ佛國郵船「シドニ」號ニ便乗シテ神戸  
ニ寄港シタル時同港ニ碇泊シ居タル我軍艦筑波艦長ハ直  
ニ該船ニ臨檢シ彼等三名ノ間ニ締結シタル契約書ヲ沒収  
シ且ツ彼等ニ上陸ヲ命シテ之ヲ勾引セリ而シテ「シドニ」  
號船長ノ言フ所ニ據レハ船長ハ全ク其實ヲ知ラヌ右三  
人ニ便乗ヲ許シタル由ナルニ付同船ハ之ヲ解放セリ然ル

百九十九

0445

ニ在東京佛國公使アルマンハ十一月五日外務省ニ來リ余ニ面晤ヲ乞ヒタレトモ當時余カ會廣島ニ旅行中ナリシヲ以テ外務次官林董ニ面會シ痛ク本件ニ關スル日本政府ノ行爲ヲ非難シ且ツ其辯解ヲ求メタリ林次官カ同公使ト面談ノ顛末ヲ余ニ報道シタル書中ニ於テ當日佛國公使ノ舉動ヲ記シ彼ハ滿面怒氣ヲ含ミ本官ト握手ノ禮ヲ行フノ際此握手ハ竟ニ最後ノ握手トナルヘキヤモ知ラスト述ヘタル程ナリシト云ヘリ又林次官ハ同公使ニ對シ本件ハ元來軍事處分ニ出テタルヲ以テ未タ詳細ノ事情ヲ確知セサレトモ畢竟戰時禁制人ヲ吟味スル爲メニ中立國ノ船ニ臨檢スルハ交戰國ノ權利ニ於テ誠ニ已ムヲ得サル次第ナリト答ヘアルマンハ直ニ其顛末ヲ本國政府ヘ通知スヘキ旨ヲ述ヘテ歸レリト因テ余ハ在佛國會稱公使ニ電訓シ豫メ佛國政府ニ照會スル所アラシメタリ其概要ハ佛國公使アルマンハ「シドニ」事件ニ付キ大ニ抗議シ本國政府ノ訓令ヲ

乞フト云ヘリ因テ貴官ハ時機ヲ見計ヒ佛國政府ヘ左ノ如ク説明スヘシ日本政府カ勾留シタル人員ハ軍事上我敵タル資格ヲ具有スル者ナリ日本政府ハ之ニ對シ自衛手段トシテ交戰國タル權利ヲ行フノ已ムヲ得サルニ出テタリ第一清國カ備用スル人物ノ技術ハ特別ナル軍事上ノ技術ナリ第二日本海軍カ右三名ヲ捕獲シタル船舶ハ一ノ交戰國ノ港(日本神戸ヲ指ス)ヨリ他ノ交戰國ノ港(清國上海ヲ指ス)ニ航行スル途中ニ在リ第三右三名ノ捕獲ハ交戰國ノ港内ニ於テ之ヲ執行セリ右等ノ理由ナルヲ以テ日本政府ノ處置ハ國際公法ニ準據スル所タルヲ疑ハス下附言セシメタリ而シテ此間筑波艦長カ捕獲シタル清國人ハ無論戰時捕虜トシテ之ヲ取扱ヒ他ノ米人二名ハ彼等ヲシテ日清兩國ノ平和恢復ニ至ル迄ハ決シテ清國ニ旅行セサルヘシ又爾後清國政府ト何等ノ契約ヲモ爲サハルヘシトノ旨ヲ宣誓セシメ之ヲ放還シタリ佛國政府ハ余カ説明ニ満足セシモノト見エ其後在

右事件ニ關シ米國政府ノ質議

東京同國公使ヲシテ我政府ニ告クルニ同政府ハ法律家ノ意見ヲ取調ヘタルニ今回日本政府ノ處置ハ正當ナルモノト認ムルニ依リ茲ニ本件ハ圓滑ニ結了シ再ヒ提起セサルヘキ旨ヲ以テセシメタリ是ヨリ先キ在神戸メサシエリトマリテーム會社(シドニー號)ハ佛國領事ヲ經テ我政府ニ對シ「シドニー」號臨檢ノ爲メ蒙リタル損害ノ要償ヲ要求シ居タレトモ既ニ本國政府ニ於テ日本ノ處置ヲ正當ナリト公言シタルニ付キ右訴訟ハ何等ノ結果モナク立消トナリタリ又米國政府モ當初ノ程ハ其國人カ日本政府ノ爲メ勾留セラレタルヲ見テ其理由ノ辯明ヲ要求シタレトモ其後事情分明ト爲リタルニ由リ同國國務大臣ハ在米栗野公使ニ向ヒ日本政府ノ處置ハ寛大公明ニシテ毫モ異存ナキ旨ヲ宣言セリ

英國商船益生號ニ對シ佐世保捕獲審檢所ニ於テ裁判ヲ行フ

ルヘキ管ナシ然レトモ其審檢ノ進行上或ハ領事裁判管轄ト何等ノ衝突ヲ起スヤモ計ラレスト懸念シタリ故ニ政府ハ海軍當局者ヲシテ凡テ中立國船舶ニ對スル戰時禁制品取扱ニ就キ最モ詳細ナル訓令ヲ發セシメタリ爾來交戰中我軍艦カ中立國ノ船舶ニ對シ檢問ヲ行ヒタルハ一ニシテ足ラサリシモ之ヲ捕獲審檢所ニ勾引スルニ至リタルモノハ僅ニ明治二十八年四月九日清國直隸省大沽沖ニ於テ我軍艦筑波カ印度支那汽船會社ノ所屬船益生號ニ對スル一件ニ限レリ即チ筑波艦長カ該船ニ臨檢セシ時ニ清國書籍ト符標シタル偽造ノ荷物中若干ノ戰時禁制品アルヲ發見セリ因テ同軍艦ハ益生號ヲ佐世保ニ在ル捕獲審檢所ニ勾引シ正式裁判ヲ經タリ右偽造荷物ハ船長及該船所屬會社カ初ヨリ戰時禁制品タルヲ知ラス單ニ普通ノ荷物トシテ搭載シタルモノタルコト明瞭トナリタルニ付キ其戰時禁制品ハ之ヲ沒取シ該船ハ直ニ解放セリ而シテ右荷物ハ在

上海獨逸商人ノ所有ナリト云ヒシモ本件ニ關シテハ英獨  
兩政府トモ我政府ニ向ヒ何等ノ抗議ヲ提起スルニ及ハサ  
リシ  
右ノ外威海衛ニ於テ丁汝昌カ我海軍ニ降伏シ尋テ自殺ヲ  
遂ケタル後我海軍ノ取領セル清國軍艦内ニ備役セラレ居  
タル幾多ノ歐米人ハ始終我軍事處分ノ下ニ支配セラレタ  
リ此ノ他今回ノ戰爭中我國カ交戰者トシテ中立國タル歐  
米各國ノ人民若ハ財產ニ對シテ施行シタル處置ニ對シ彼  
等カ平素ノ慣習ニ似ス領事裁判制度ノ利器ヲ使用セムト  
シタルコト甚々希ニシテ偶々彼此ノ間多少ノ爭論ヲ生シ  
タル時アルモ其紛爭甚々激烈ニ至ラサル内ニ妥當ノ局ヲ  
結フヲ得タリ是レ第一ニ今回ノ戰爭ニ於テ我海陸軍ノ行  
動概シテ國際公法ノ規定ニ遵由シ彼等ヲシテ容喙ノ機會  
ナカラシメタルニ由ルト雖モ畢竟我國カ比年歐洲文明ノ  
主義ヲ採用シ百般ノ改革着々成功シ且ツ今ヤ既ニ歐米四

五ノ大國ト對等條約ヲ締結シ不日將ニ他ノ各國トモ同一  
條約ヲ了結シ數年ヲ出スシテ所謂領事裁判管轄ノ痕跡ヲ  
我國内ニ留メサルニ至ラムトスルノ時會ナレハ外國政府  
モ今更ニ治外法權ノ議論ヲ囑々スルノ愚計タルヲ覺悟セ  
シニ非サルナキヲ得ム乎ホルランド博士ハ其著論中ニ於  
テ近年日清兩國ノ間各自ノ文明思想及改革事業ノ成績等  
差ヲ較量對照シタル後支那ノ裁判所并ニ諸法典ハ未タ歐  
洲諸國ノ希望ヲ満足セシムルニ至ラサル故ニ該帝國内ニ  
於テ外國人ノ治外法權ヲ存スルハ必スシモ不當ノコト、  
謂フヘカラス然レトモ歐洲各國ハ將ニ日本ニ對シ治外法  
權ヲ拋棄セムトスル時期ハ已ニ到着セリ故ニ日清戰爭ノ  
開始ニ際シ若シ吾人カ世人ニ告ケテ日本ハ試驗ノ爲メ文  
明列國ノ仲間ニ加入スルヲ許スヘシト雖モ支那ハ唯其候  
補人タルニ過キサルヘシト云ヒタルコトアリトスルモ其  
言語決シテ失當ニ非サルナリト結論シタリ日本ハ果シテ

長髮賊亂時代清國  
ニ於ケル歐米各國  
ノ領事裁判權ノ濫  
用

試験ニ及第セシヤ否ヤハ自ラ別論ニ屬スルモ茲ニ今回我  
國カ交戰國ノ權利ヲ行フニ際シ歐米各國ニ對シ重大ナル  
葛藤ヲ起サ、リシ原因如何ト云ヘハ余ハ我國ニ於ケル文  
明ノ進歩ニ基因セリト答フルニ躊躇セズ尙シ假ニ今回ノ  
戰爭ヲシテ十年前以前我國ノ進歩未タ今日ノ如ク著大ナラ  
サル時期ニ起ラシメハ我軍事ノ運動決シテ今日ノ如キ自  
由ヲ得ル能ハサリシヤ殆ト疑テ容レヌ現ニ我對敵タル清  
國ハ今回捕獲審檢所ヲ設置セズ亦縱令之ヲ設置シタリト  
スルモ歐米各國政府ハ安然其國民ノ生命財産ヲ以テ清國  
ノ軍事裁判ニ委託シ能ハサルハ論ヲ待タス  
前例ノ參考トシテ茲ニ長髮賊亂ノ時代ニ於テ歐米各國カ  
如何ニ治外法權ノ利器ヲ濫用シ清國政府ノ正當行爲ヲ妨  
害シタルカヲ畧記スヘシ長髮賊徒カ方ニ清國地方ニ猖獗  
ヲ極メタル時ニ於テ清國ニ在留スル歐米各國ノ商民等ハ  
領事裁判管轄ノ鐵壁ヲ恃ミ各國ノ旗章ヲ翻シタル船舶ヲ

以テ揚子江ヲ上下シ擅ニ清國官軍ノ哨兵線ヲ通過シ清國  
官軍ノ拿捕ヲ逃レ各種ノ戰時禁制品ヲ賊軍ニ輸送シタル  
ノ事實ハ今尙\*世人一般ノ記憶ニ存スル所ナリ又クレー  
ン(英國)「パフュー」「ガーター」「バットラー」及「ウワード」(以上米  
人)等  
ハ皆賊軍ニ投シテ清國政府ニ敵抗シ竟ニ官軍ノ爲メニ生  
擒セラル、ニ至リタル者ナリ然ルニ彼等ノ所屬スル各國  
領事ハ清國政府ニ迫リ之ヲ交付セシメタリ更ニ最モ人口  
ニ膾炙スル一例ヲ舉レハ米國人「バーンニツ」ノ一件ナリ  
彼ハ始メ長髮賊亂ノ時ニ於テ曾テ清國官軍ヨリ連戰連捷  
軍隊ノ綽號ヲ博シタル米國人「ウワード」將軍ノ隊ニ隸屬シ  
後竟ニ將軍ノ職ヲ襲ヒタリシニ如何ナル譯ニカ清國軍兵  
ハ兎角彼ニ信服セサルコト多ク彼ハ快々ニ堪ヘサリケム  
遂ニ其麾下ノ外國傭兵ヲ率ヒ欸ヲ賊軍ニ通シ官軍ニ敵對  
スルニ至リ而シテ一千八百六十四年ノ頃彼ハ英國人カリ  
ングナル者ト共ニ生擒セラレタリ在上海米英兩國領事ハ

右兩人ヲ其領事廳ニ於テ糾問スル爲メ之ヲ交付スヘシト  
清國政府ニ迫リ彼等ヲ引渡サシメタリ「カリング」ハ其後如  
何ノ處分ニ遣シヤ詳ナラサレトモ「パーシエツキン」ハ在上  
海米國領事廳ニ於テ清國ヲ退去シ再ヒ同國ニ歸來スヘカ  
ラストノ言渡ヲ受ケタル上放棄セラレタリ然ルニ彼ハ暫  
ク橫濱ニ滞在シタル後再ヒ長髮賊ニ投合スル爲メ清國ニ  
渡航スルノ目的ヲ以テ「ゼ子ラル、シャーマン」號ト云フ一隻  
ノ米國船ヲ占有シ一千八百六十五年五月臺灣打狗港ニ於  
テ數多ノ外國傭兵ヲ招募シ同船ヲ精裝シタリ清國政府ハ  
此報ヲ聞クヤ直ニ「パーシエツキン」及其同類ヲ船内ニ於テ  
捕縛セムト企圖シタレトモ例ノ領事裁判管轄ノ爲メニ清  
國政府ハ米國ノ船内ニテ何人タリトモ捕縛スルノ權利ナ  
シトノ說ニ妨ケラレ止ムヲ得ス單ニ「パーシエツキン」及他  
ノ嫌疑者カ同港ニ上陸スルヲ防遏スル手段ヲ盡シテ僅ニ  
自ラ慰メタリ「パーシエツキン」ハ同船ヲ廈門ニ進メ賊軍ニ

投合セムトスル際彼及同類ノ外國傭兵ハ復清國官軍ノ爲  
メニ生擒セラレタリ其後彼一人ハ踪跡不分明トノ事ニテ  
米國領事廳ニ復歸セサリシト雖モ自餘ノ外國傭兵ハ各自  
ノ領事ヨリ清國政府ニ迫リ其交付ヲ要求シ之ヲ引渡サシ  
メタリト云フ  
以上ノ所記ニ由リ當時清國政府カ領事裁判管轄ノ爲メ如  
何ニ軍事ノ行動ヲ妨害セラレタルヤヲ視ルヘシ而シテ「ゼ  
子ラル、シャーマン」號ノ事件ハ稍、今回我國ニ於ケル「シドニ  
」號ノ事件ト類似セリ然ルニ清國政府カ「ゼ子ラル、シャ  
ーマン」號ニ對スル處置ハ各國政府ノ承諾ヲ得ル能ハスシテ  
我政府カ「シドニ」號ニ對シ執行シタル軍事處分ハ各國ニ  
於テ何等ノ異議ヲ容ル、者ナキノミナラス佛國政府スラ  
遂ニ我政府ノ行爲正當ナルヲ認メタリ余ハ既ニ今回ノ戰  
争中我政府カ歐米列國ニ對シ交戰國タル權利ヲ執行スル  
際領事裁判管轄權ト重大ノ抵觸ヲ起サ、リシ基因ハ畢竟

事實問題ニ屬シ學理上ノ問題ニ屬セスト云ヘリ然レトモ  
後來是ニ因テ國際公法上領事裁判制度ニ關スル疑問ヲ解  
釋スヘキ好例ヲ與ヘタルハ亦一個ノ快事ト謂フヘキナリ  
第十四章 講和談判開始前ニ於ケル清國及歐洲諸強

國ノ舉動

平壤黃海戰捷ノ後、日軍ハ疾風枯葉ヲ捲クノ勢ヲ以テ猛進  
セリ十月二十四日我第二軍ハ花園口ニ上陸シ十月二十五  
日我第一軍ハ虎山ニ戰ヒ其翌二十六日九連城、安東縣ヲ略  
取シ二十九日鳳凰城ヲ陷レ十一月六日我第二軍ハ金州城  
ヲ攻取シ其翌七日大連灣砲臺ヲ占領シ十一月十一日我第一軍ハ  
連山關ヲ占取シ十八日岫巖ヲ畧取シ二十一日我第二軍ハ  
旅順口ヲ陷レ十二月六日復州ヲ畧取シ十二月十二日我第一軍ハ  
柞木城、營城子ヲ占畧シ十三日海城ヲ攻取シ本年一月十日  
我第二軍ハ蓋平ヲ畧取シ二十二日大山第二軍司令官ハ山  
東省營城灣ニ上陸シ三十日ヲ以テ威海衛ノ砲臺ヲ攻撃シ

タリ是レ本年一月三十一日清國欽差全權大臣張蔭桓、邵友  
濂等カ廣島ニ到着スル迄ノ間ニ於ケル我軍連戰連捷ノ事  
迹ナリ而シテ此連戰連捷ハ如何ニ清國及歐米各國ニ向ヒ  
其影響ヲ及ホシタルカ

清國ハ今ヤ敗運漸ク迫リ一日モ早ク戰爭ヲ息止スルヲ望  
メリ殊ニ李鴻章ノ如キ將來ノ安危ヲ先見スル人物ニ在テ  
ハ何等ノ代價ニテモ平和ヲ買ハサルヘカラスト心中ニ決  
定セシナルヘシ然レトモ何ノ邦國ニテモ斯ル場合ニ於テ  
徒ニ虛勢ヲ張り体面ヲ飾ルノ庸輩多衆ニシテ之カ爲メ國  
家ノ大謀ヲ擾ルノ例ニ乏カラス今日清國政府部内ニ於テ  
モ和議尙ホ早シト唱ヘ或ハ全然和議ニ反對セスト雖モ其  
講和條件トシテ説ク所ノモノハ到底敗者カ勝者ニ向ヒ發  
言スルニ憚ル程ノ不釣合ノ妄案ヲ提出スルモノモアルヘ  
ク現ニ張邵兩使ノ講和談判破裂シ李鴻章カ再ヒ講和使節  
トシテ我國ニ來航セムトスルノ時期即チ威海衛既ニ陷落